

二級河川山崎川水系 河川整備計画

平成26年3月20日

名古屋市

目 次

1. 流域及び河川の概要	1
1.1 流域の概要	1
(1) 地形・地質	2
(2) 気候	3
(3) 植生	3
(4) 社会環境	3
(5) 歴史	3
1.2 河川の概要	5
2. 流域及び河川の現状と課題	8
2.1 治水に関する現状と課題	8
(1) 既往水害の概要	8
(2) 河道整備の状況	10
(3) 治水に関する課題	12
2.2 水利用及び河川環境に関する現状と課題	13
(1) 水利用の現状	13
(2) 河川環境に関する現状と課題	13
2.3 河川整備に関する住民の意向	16
3. 河川整備計画の目標に関する事項	17
3.1 河川整備の基本理念	17
3.2 河川整備計画の対象区間	18
3.3 河川整備計画の対象期間	18
3.4 洪水や高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関する目標	18
3.5 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する目標	19
3.6 河川環境の整備と保全に関する目標	19
(1) 自然環境に関する目標	19
(2) 水質に関する目標	19
(3) 親水に関する目標	20
(4) 景観に関する目標	20

4. 河川整備の実施に関する事項	21
4.1 河川工事の目的、種類及び施行の場所	
並びに当該河川工事の施行により設置される河川管理施設の機能の概要	21
4.1.1 洪水や高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	21
(1) 河川工事の目的、施行場所、及び主な内容	21
(2) 下流部	22
(3) 中流部	24
(4) 上流部	26
(5) 流域での対策等の概要	28
(6) その他の内水対策等	28
4.1.2 河川環境の整備と保全に関する事項	29
(1) 河川環境整備の施行場所	29
(2) 区間ごとの留意事項	29
(3) 自然環境に関する事項	29
(4) 親水に関する事項	30
(5) 景観に関する事項	30
4.2 河川の維持の目的、種類及び施行の場所	31
4.2.1 河川の維持の目的及び施行の場所	31
4.2.2 洪水や高潮等による災害の発生の防止又は軽減に関する事項	31
(1) 河道の維持	31
(2) 河川管理施設の維持	31
(3) 被害を軽減するための取組	31
4.2.3 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持に関する事項	33
(1) 河川の適正な利用及び流水の正常な機能の維持	33
(2) 防災用水としての河川水の利用	34
4.2.4 河川環境の保全に関する事項	35
(1) 良好な自然環境の保全	35
(2) 水質の保全・改善	35
(3) 水辺とのふれあいの場の維持・形成	36
(4) 良好な景観の維持・形成	36
<付 図> 平面図及び縦断図	37
<参 考> 河川整備計画用語集	41(42)
河川整備計画動植物写真集	41(47)

1.1 流域の概要

なお、源流となる千種区平和公園内の猫ヶ洞池付近から二級河川上流端までの区間は、準用河川に指定されている。

流域は名古屋市千種区、^{しょうわく}昭和区、^{みづほく}瑞穂区、^{みなみく}南区、^{みなとく}港区、^{てんぱくく}天白区の一部の区域により構成され、2005年(平成17年)時点の流域内の人口は約25万人、2003年(平成15年)時点の流域内の土地利用は、宅地等の市街地が約97%、山林が約1%、畑その他農地が約1%、河川・湖沼が約1%の面積を占めている。

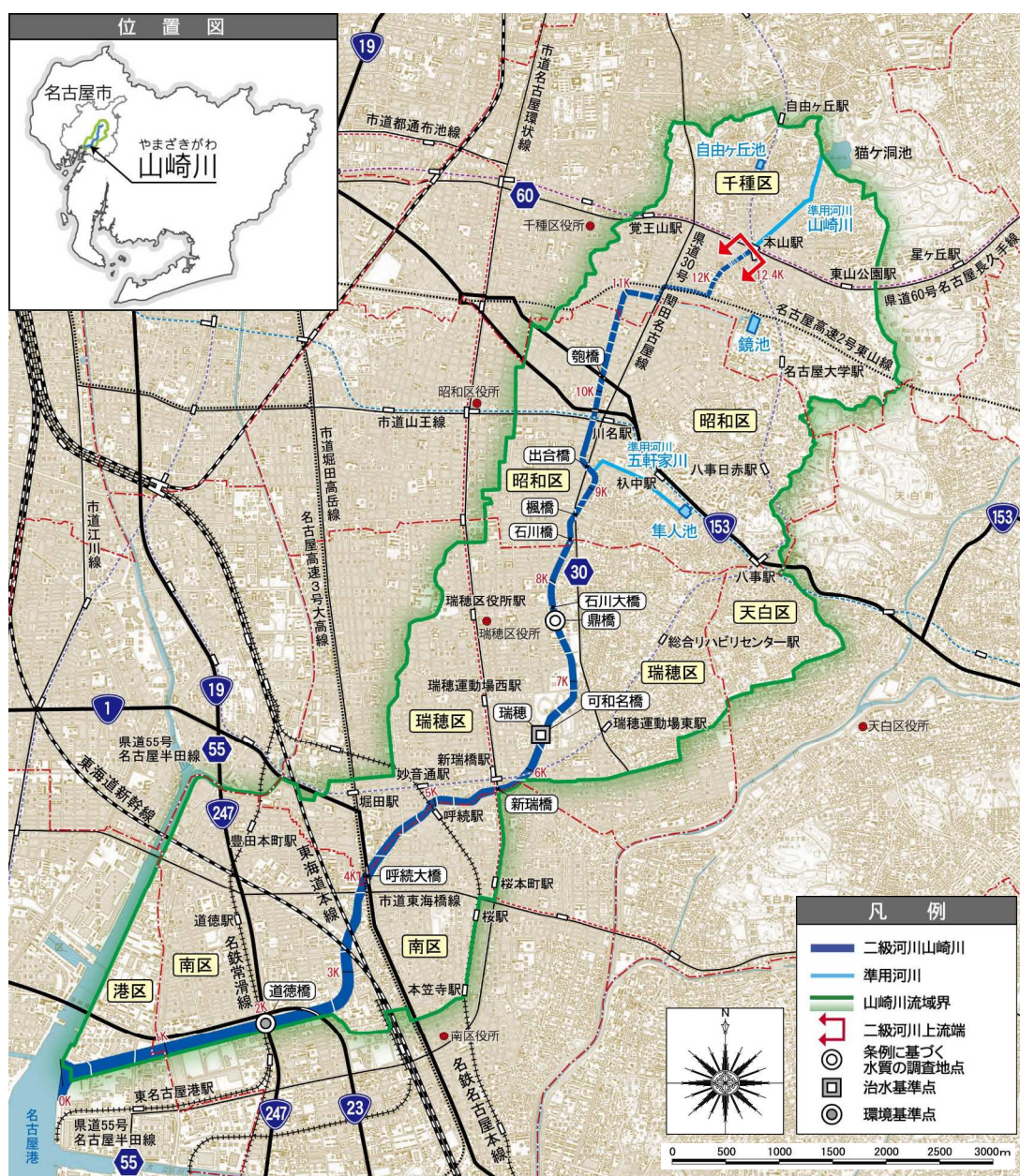


図-1.1 山崎川流域図

(1) 地形・地質

地形については、上・中流部は、^{やごときゅうりょう}八事丘陵の南西部と^{あつただいち}熱田台地の間を流下し、^{かわなばし}可和名橋付近から下流は沖積低地を流れている。八事丘陵は、洪積世に堆積した海性の地層で、その後海退、侵食により現在の地形を形成している。地質的には砂礫を中心とした地層で、^{みずほ}瑞穂グラウンド付近では厚さ約35mまで堆積し、南西に向けて傾斜している。

一方、右岸側の熱田層は、時代としては八事層よりも新しく、海拔20mから10m前後の高さの平坦な台地である。地質的には、砂と粘土層の互層で全体の厚さは最高60mに達する。

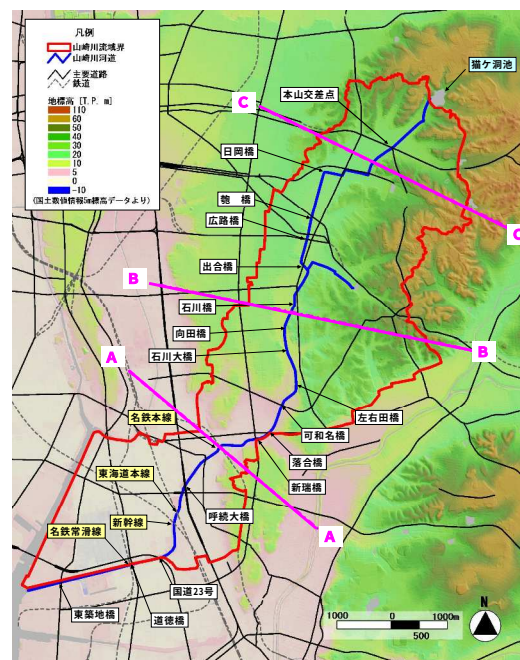


図-1.2 山崎川流域の地形

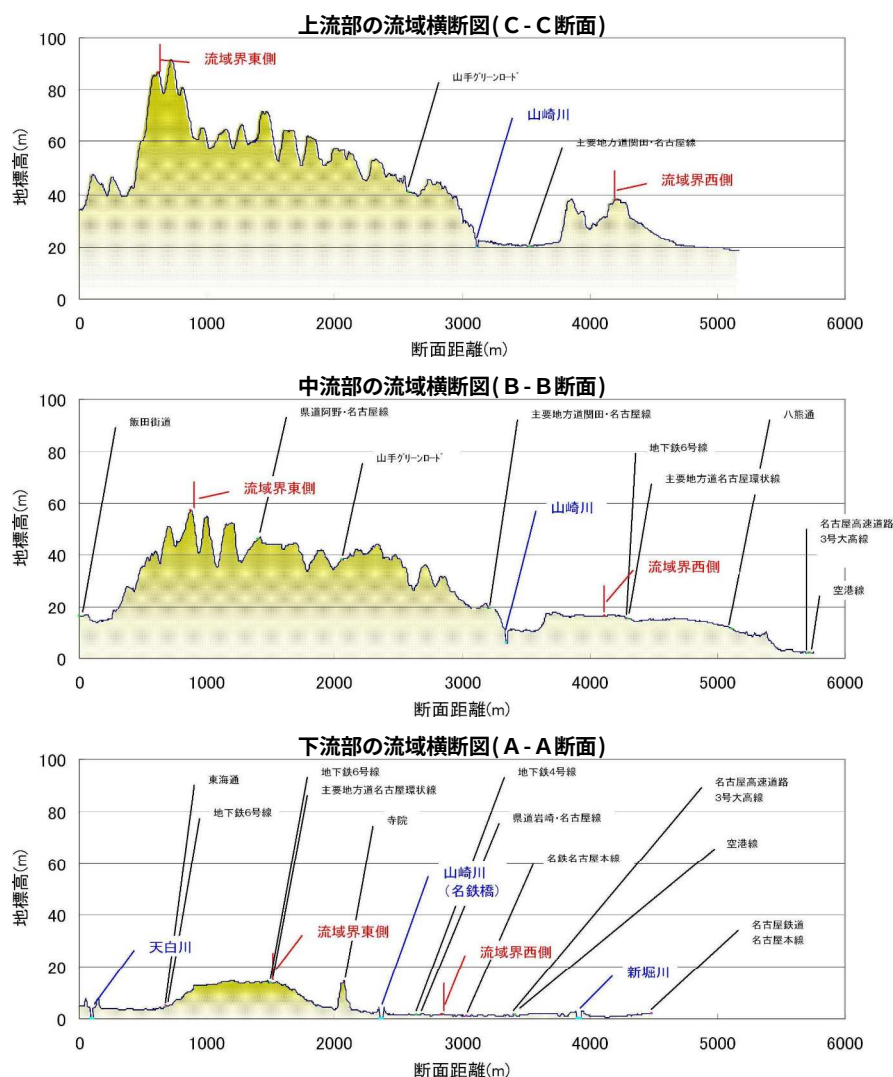


図-1.3 流域横断面図

(2) 気候

名古屋地方気象台の観測によると、1971年(昭和46年)から2012年(平成24年)までの平均雨量は約1,559mm、平均気温は15.6℃である。

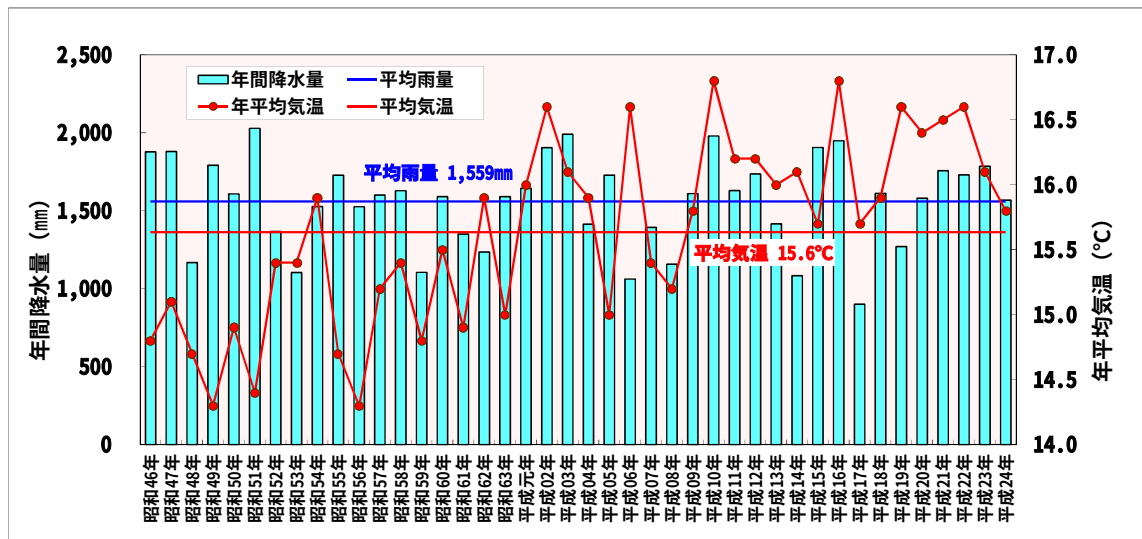


図-1.4 名古屋の気温と雨量

(3) 植生

流域には一部に自然植生が分布しているものの、代償植生(人間の影響を受けて遷移した植生)を含めてもわずかであり、その他は市街地または工場地帯となっている。

(4) 社会環境

交通網については、道路網、鉄道網が発達している。道路は、下流部を国道247号、国道23号、国道1号が、上流部を国道153号が横断しており、鉄道は、下流部で名鉄常滑線、J R東海道新幹線、J R東海道本線、名鉄名古屋本線が橋梁で横断している他、中流部の新瑞橋付近では地下鉄 桜通線 及び 名城線 が、さらに上流部で地下鉄鶴舞線及び 東山線 が地下を横断している。このため数多くの道路橋、鉄道橋及び地下鉄の地下横断がある他、県道関田名古屋線と市道鏡ヶ池線を流下する区間では、道路機能との重複のためトンネル河川となっている。

流域内の市街化は早くから進んでおり、1977年(昭和52年)には市街化率は94%(細密数値情報(10mメッシュ土地利用)中部圏)に達していた。その後もさらに市街化が進展し、2003年(平成15年)では市街化率は97%(数値地図5000(土地利用)中部圏2003年)となっている。

また、本流域は「東海地震に係る地震防災対策強化地域」及び「東南海・南海地震防災対策推進地域」に指定されている。

(5) 歴史

山崎川は、縄文時代(約1万年前)には、現在の瑞穂運動場あたりで海に流れ込んでいたが、その後、海面低下と土砂の堆積で河口は少しずつ南に下がり、平安時代には新瑞橋付近が河口であったと推定されている。江戸時代に入ると、1701年(元禄14年)完成の 巾着新田 (現在の呼続大橋下流右岸)をはじめ新田の開発が進み、山崎川は人工的に延長されていった。

明治時代に入ると、河口付近は工場地帯造成の埋め立てが進み、1910年(明治43年)にほぼ現在の姿となった。1728年(享保13年)、暴れ川であった天白川^{てんぱくがわ}の洪水を山崎川へ流入させるため現在の瑞穂区と南区の境界付近に水路を造ったが、山崎川が度々氾濫するようになって1742年(寛保2年)に元の流路に戻している。

檀溪^{だんけい}付近は、古くから景勝、行楽の地として知られ、江戸時代には文人墨客が多く訪れた幽玄の地であった。このあたりは、昭和30年代(1955年～)になっても川の中に大きな岩が転がり、溪谷の雰囲気が残されていた。

山崎川は、江戸時代期には水運にも利用されており、師長橋^{もろながはし}付近まで舟が往来し、年貢米の積み出しなどを行っていたようである。

現在名所として親しまれている桜並木は、1928年(昭和3年)に耕地整理組合によって植樹されたものであり、第二次世界大戦後に花見で賑わうようになった。



図-1.5 かつての檀溪の様子
(尾張名所図会より)

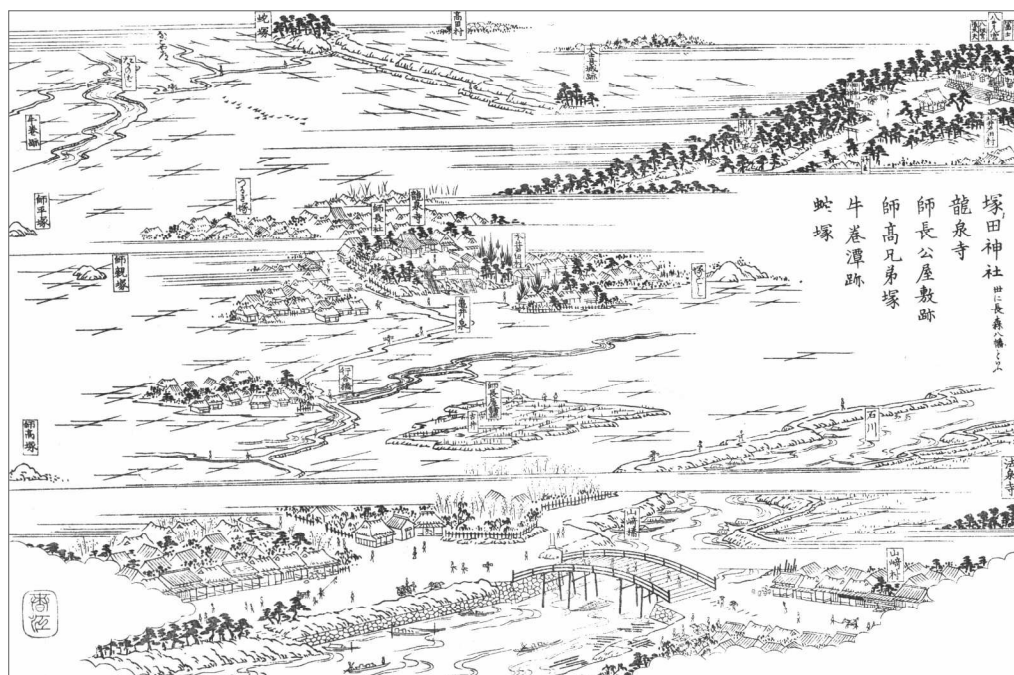


図-1.6 山崎川・山崎橋付近の水運(尾張名所図会より)